

大理石とブロンズの祖国

——近代イタリアの国民形成と統合イデオロギー——

卵が先か鶏が先か——国家形成と国民形成——

イタリアは、所謂リソルジメント運動によって独立と統一を達成し、近代国家として出発した。時に一八六一年のことである。同じ後発資本主義国の日本の明治維新に先立つこと七年、ドイツ統一に先立つこと一〇年のことである。

イタリアのリソルジメント運動と明治維新との比較は一つの研究として興味あるものである、と日本史の立場から指摘されたのは中村政則氏である。⁽¹⁾一九世紀イタリア史を研究対象とする者として、その指摘に心強い支持者を得たという印象をうけた。

藤 澤 房 俊

イタリアのみならず、近代国家の成立と言うとき、その対として国家の実体である国民が存在することは自明のことである。イタリアの歴史的経過として、フランス革命期のジャコバン主義者、カルボネリーア（炭焼き党）に代表される秘密結社運動、マッツイーニの「青年イタリア」、カヴールによる『リソルジメント』紙の発刊などによる国民意識の高揚によって国民国家が成立し、あたかもその段階で国家意識をそなえた国民も同時に誕生した、という歴史的錯覚におちいることがある。⁽²⁾

近代国家を構成する国民の実体を論ずるとき、国家にたいする「帰属意識」と国民の「連帯意識」の度合

いが一つの指標である。イタリアの「帰属意識」と「連帯意識」が、近代国家の出発点である一八六一年の段階ですでに形成されていたかと言えば、それは否と言わざるをえない。ダゼーリョが統一直後に述べた「イタリアは成った。これからイタリア人を作らねばならない」という言葉をひくまでもなく、「イタリア人を作る」、すなわちイタリアの国民形成をおこなうことは、統一国家の指導者たちに課せられた至上課題であった。

日本でも同じことが言える。幕藩時代の藩民の藩主・藩への帰属意識から、明治維新を挟んで、天皇制を中心とする国家へ帰属意識を変えること、北海道から琉球にいたる国民の連帯意識を形成することは、明治政府が早急に取り組まねばならないことであった。その課題の達成に国家装置としての教育や軍隊が動員されたことは、ここで指摘するまでもない。しかし、国民形成において、そうした国家装置だけでは不十分であった。「王権と宮廷という権力の中心と教会という宗教的な統合の装置を拒否した、いわば白紙の上

新しい秩序を作りだす国民国家は、新たな権力の中心と統合のイデオロギーの創出に専念しなければなら(3)ない。フランスに関連して、西川長夫氏はこのように指摘されている。

本稿は、統一イタリアの統合イデオロギーを君主制に求め、統一によって「祖国の父」となる国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世が、国民形成においていかなる機能を果たしたかを解明しようという試論である。(4)

国王のイメージの変容——「紳士王」・「一兵士としての国王」・「祖国の父」——

ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世が、統合イデオロギーとして機能を始めるのは統一前のことである。それは、かれに「紳士王」という呼称が与えられた一八五〇年からであったと言える。サルデーニャ王国で宗教裁判所の廃止、教会・僧侶の中世的特権の剥奪に関する法律、所謂シッカルディ法案が議会で承認された。信仰厚い国王は、教皇の反発を恐れながらも、そ

の法律に署名をおこなった。

国王が教会の圧力に屈して法案の署名に洩ることも予測されていただけに、ダゼーリヨ首相は、基本法にしたがって署名した国王を近代的国王にふさわしい勇気ある「紳士王」と呼んだ。その時に、「紳士王」の起源を求めることができる。⁽⁵⁾

「紳士王」という呼称は、サルデーニャ王国による統一を支持する政治勢力の機関紙等によって、しだいに国内で普及していった。一八五七年以降、主たる軍事力をサルデーニャ軍とし、民主主義革命を否定し、君主制によるイタリア統一を標榜する「国民協会」による世論作りによって、「紳士王」はイタリア諸邦にも広く浸透していくことになる。

「紳士王」の存在は、統一以前のマッツィーニに代表される共和派とカヴールに代表される君主派のイタリア統一をめぐる対立の「最高の調停者」の役割と、ガリバルディを含む多くの共和派を巻き込みながら統一・独立という一点に全勢力を結集する機能を果たすことになる。一八五九年の、イタリア全土から聞こえ

てくる「苦悩の叫び」に応える用意があるという国王演説は、かれに「イタリアの救世主」というイメージを刻印することになった。さらに、対オーストリア戦争（一八五九年）で先頭に立って戦う国王に「一兵士としての国王」というイメージが加わり、統一後には「祖国の父」というイメージが固定化することになる。

しかし、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世の実像は、「紳士王」という呼称とは裏腹に、粗野で、田舎者で、漁色に走る艶福家として有名であった。国王が、鼓笛隊長の娘で、一三歳の年の差のあるロジーナとの間に三人の子供をもうけていることは、公然の秘密であった。国王が「無学で、趣味の悪い、方言をまくしたてる」ロジーナを正妻にしようとしたとき、カヴールはロジーナとの関係に終止符を打つべく苦言を呈した。この生身の国王像、あるいはありのままの国王像が表に出てしまうと、統一のシンボルである「救世主」というイメージが機能しなくなる。生身の国王と統一のシンボルとしての「救世主」の間の乖離を見えなくすることに努力したのが、カヴールであった。

このように、シンボルとして作り上げられた「紳士王」と政治的実権をにぎるカヴールとの関係は、決して良好なものではなかった。とくに、「紳士王」が政治的・軍事的に実権を握ろうとしたとき、必然的に齟齬を生じることになる。オーストリア軍と「朕に関する限り」という留保をつけて結んだヴィッラフランカ和約(一八五九年)が、それである。カヴールは、フランスの援軍なしにサルデーニャ軍単独でも戦い抜くと進言したが入れられず、首相を辞任した。

国民形成における統合イデオロギーとして重要なのは、生身の国王の意志や行動もさることながら、リソルジメントの過程で作りに上げられていった「紳士王」としてのイメージである。艶福家である生身の国王と、シンボルとして作りだされた虚構の「紳士王」を腑分けして、生身の国王と虚構の「紳士王」の乖離を明らかにする必要がある。それは、「紳士王」あるいは「一兵士としての国王」というイメージが、誰によって何故作られ、どのように利用されたのか、そしてそこでのようなダイナミズムが働いたかを明らかにするこ

とでもある。結論を先取りして言えば、君主制による統一を進めるカヴールに代表される穏和派が、自分たちの存在基盤である国王を中心とする国家メカニズムの確立を緊急の課題とし、虚構の国王の権威を高く掲げ、それを自由に操作しようとしたのであった。

巡幸の軍事的・政治的意味

「多様性の統一」を達成したイタリア王国は、短期間に一挙に拡大した国家空間を精神的に統合するために、「祖国の父」と新しい国民の緊密な関係を作りだし、新しい国家権威を確立する必要があった。そのために、「祖国の父」の権威を国民に視覚的に感知させるデモストレーションとして、巡幸が利用された。

一八七一年のローマ遷都までの巡幸は、政治的・軍事的特徴を示している。一八六〇年二月のミラーノ、一八六〇年の南部イタリア、一八六六年のヴェネツィアへの巡幸が、それである。シチリアを征服し、南イタリアを北上する民衆の英雄ガリバルディと南下する「一兵士としての国王」は、ナーポリ近郊のテアー

ノ河畔で遭遇する。それは、イタリアの政治的統合を完成するための、カヴールによる国王の権威の利用した政治技術によるものであった。

この遭遇の様子は、様々な粉飾が施され、誇張されて極めて短期間のうちに、民衆のあいだに流布することになる。その出会いの模様を千人隊に参加したジャンリストであるアルベルト・マリーリオは次のように記している。

軍服に身をかためた国王は、赤シャツと灰色のボンチヨ姿の両シチリア王国の「解放者」に近寄り、手を差し延べて握手をかわした。そして、次のような会話が交わされた。

おお！ 親愛なるガリバルディ 元気でいたか？

とても元気です 国王陛下はいかがでいらっしやいますか。

とても元気だ。

ガリバルディは周りの人々に向かって声高く、「ここにイタリア国王がおられるのだ！」と叫んだ。兵士たちが、それに答えるように、一斉に「国王万

歳！」と叫んだ。

この会見は、私心を捨てて栄誉を求めず、国王に忠誠を尽くす典型的な臣民としてのガリバルディ像と、親しく臣民を思う民衆的な国王のイメージを作りだし、「一人の庶民が一人の国王に王国を進呈した」という極めて政治的な演出が施されたのである。この時から、それまで人格的特徴を示す「紳士王」という呼称に変わって、神聖にして侵しがたい雰囲気(1)を漂わせた呼称である「祖国の父」が主流となる。

一八六二年四月には、南部イタリアの匪賊の反乱を慰撫する目的で、ラタツィ首相の要請を受けて、国王は南部イタリアを巡幸している。これも政治的特徴を強く示している。巡幸は、国家が国王を民衆の前に直接押し出すことによって、その存在を知らしめ、国王の威力とありがたさを感じさせ、その国王をいただく国家の力強さを印象づけることを目的としていた。

巡幸に際して、国王はリソルジメント運動に参加した義勇兵を表彰し、かれらの愛国心を讃えた。そのことは、統一国家への愛国心をさらに鼓舞する目的も持

っていた。このような目的を持つ巡幸は、国王や王室が行うのではなく、支配機構の確立に関わる問題として、統一国家の指導者が行ったものである。それは、国民形成に巡幸という形で国王が動員されたということでもあった。

一八七八年に第二代イタリア国王に即位したウンベルト王の巡幸は、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世のそれとは異なり、地震被災地、地域開発工事・病院建築などのくわ入れ式、博覧会の除幕式、ボローニャ大学創立八〇〇周年記念式典といったものになっている。このことは、政治的統合の目的をもつ軍服姿のヴィットーリオ・エマヌエーレ二世から私服姿のブルジョア君主としてのウンベルトへの変化を示している。

多木浩二氏は、明治天皇の巡幸に関連して、次のように指摘している。「民衆には、巡幸に際して国王だけが見えて、政治指導者の意図した支配機構は見えなかったが、統一政府の指導者が選択した巡幸の場所が、国家の直面する政治・産業などの諸問題を反映しており、そこに政治指導者の巡幸の意図を読み取ることが

出来る」⁽⁸⁾。

軍服姿から私服姿への衣装の変化は、「本質的な政治的かつ知的な次元での変化の一部」を示している。政治指導者は、この衣装の変化に見られるように、ウンベルト時代に産業・文化・教育を振興し、近代国家の長にふさわしいブルジョア国王への変身を意図したのである。

「祖国の父」の神話化

一八七八年一月九日、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世は五八歳でこの世を去った。一八四九にサルデーニャ王国の国王に即位して二九年、一八六一年にイタリア王国の初代国王となって一七年、ローマ遷都から七年のことであった。

「祖国の父」の死は、当時の新聞によれば、イタリアの唯一の「確実な支え」と「壊れることのない」保証を失ったと国民に感じられた。それは、「国民総意の嘆き」と表現されている。ローマでの大喪の礼以外に、サヴォイア王家発祥の地トリノー、ナーポリ、ヴェネ

ーツィアといった大都市、小さなコムネ、そして外国のイタリア人コロニーでも葬儀が行われた。その葬儀に合わせて、各地で発行された膨大な数の追悼文集が、一橋大学図書館のリソルジメント・コレクションのなかにある。

国内・国外で盛大に行われた「祖国の父」の葬儀は、「国民総意の嘆き」という言葉に象徴されるように、イタリア国民とサヴォイア王家の一体化した一つの家族として、イタリアを作り出す政治的な機能を果たした。サヴォイア王家を中心とする「大家族」としてのイタリアという思想は、一八八〇年以降の公立の初等学校の教科書でも強調されている。「祖国の父」の死の政治的利用は、墓地をめぐる論争に明確に見られる。

サヴォイア王家歴代の墓はトリノ郊外の風光明媚な丘陵地であるスーベルガにある。しかし、国王の死去の直後から、イタリア国王の墓は首都ローマで、それも紀元八〇年にあらゆる神を祭る神殿としてアグリッパが建てたバンテオンに、という声が目増しに高まる。国王の墓をめぐる論争は、国家指導者の政治的動

機がサヴォイア王家の意志を抑える方向で展開していた。ここに、イタリア王国をサヴォイア王家の連続としてではなく、古代ローマから連続として続く歴史のなかに統一イタリアを位置づけ、古代ローマとイタリア王国の歴史的連続性を作り出すということになった。

教会として機能していたバンテオンは、「祖国の父」の墓となったことで、イタリア王国の聖地となり、国民の巡礼の対象となることになる。同時に、このときから「祖国の父」は礼拝の対象として神聖化されることになる。

古代ローマとイタリア王国の歴史的連続性を意図的に作り出すために「祖国の父」をバンテオンに埋葬した背景には、「多様性の統一」であるイタリア王国のなかに社会的・政治的・地域的裂け目が拡大しつつある、という認識が国家指導者に強く意識されはじめていたことがあった。その裂け目は、新国王の暗殺未遂事件や、「社会主義の実験場」であるロマーニャ地方で多くのコムネが大喪の礼への出席を拒否したことに現出

することになる。国家指導者は、大喪の礼において「祖国の父」の歴史的意義を象徴化することで、統合イデオロギーとしての君主制を強化し、社会的・政治的裂け目を埋めようとしたのである。

国王の死去をはさんで、民衆の国王にたいする視線あるいはまなざしが変化するようになる。国王と国民の精神的統合をはかるための巡幸は、古典的な国王の視覚化であった。一八七八年以降になると、ほとんどのコムーネに「祖国の父」の銅像や大理石像が雨後の筍のように建立されることになる。

顕彰された国王は、視覚的に国民に感知させるように、独立と統一を達成した統合イデオロギーとしての「祖国の父」を意図的に神話化した政治的図像であった。国王の像は、超歴史的な存在である国家主権の象徴として、威厳に満ちた力強い、民衆には優しさをたたえたワンバタンとなっていた。それは、民衆の側から見れば尊敬に値し、期待した国王像でもあった。それは、もちろん、民衆が自発的に作りだした期待すべき国王像というより、統一後に政治指導者が政治技

術によって絶えずそして反復して民衆のなかに強制し、呼び覚ました国王像であった。

国家主権の象徴である国王を民衆の生活空間の中心である広場に固定化し、永久的にそれを記憶させ、日々の生活のなかで恒常的に想起させることは、国王そしてそれが統治する国家と国民を一体化させるといふ新しい統治技術であった。また、国王の銅像と各々のコムーネのリソルジメント運動の愛国者の銅像がワンセットになって、国王と国民の、国家と各コムーネの結合が意識的に創りだされていった。

リソルジメント二五周年にあたる一八八四年一月九日に、「祖国の父」の眠るバンテオンへの国民巡礼団が組織され、約七万人が参加した。一月九日という日には、二つの意味があった。第一点は国王の命日である。第二点は、二五年前「救世主」として国王を刻印することになった「苦悩の叫び」演説が行われた一月一日に近いということであった。国家主導ではなく、在郷軍人会を中心に自然発生的に組織された草の根的なものであった国民巡礼団は、その目的を「イタリア統

一の愛国的価値と立憲君主制への忠誠を鼓舞するもの」としている。ローマに到着した巡礼団は、音楽隊を先頭に各県・各コミュニネの旗と続いて、パンテオンへと向かった。そのなかには、横浜のイタリア人コーニーが派遣した代表も含まれている。⁽⁹⁾

国民墓参団にたいする外国の反応は鋭く、隠された政治的意図を突いている。一八八四年一月のモーニング・ポスト紙は次のように述べている。

「大王、紳士王、祖國の父はイタリアで崇拜の対象となった。かれのなかに新しい理念と新しい目標を充足するすべてが集中し、統一された。それらは、祖國で世俗の主を見いだした近代のギベリズモ（皇帝主義）である」。

この指摘からも明らかなように、「祖國の父」を祭ったパンテオンが、民衆レベルで聖地として機能しはじめ、神聖化されはじめたことを見ることができるといえる。

「祖國の父」の祭壇ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世記念堂

「祖國の父」の神話化の究極は、ローマの中心地ヴェネツィア広場に威風堂々と聳える白亜の大殿堂ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世記念堂である。「世界最大のタイプライター」あるいは「世界最大のウェディングケーキ」と悪評紛々の折衷主義の建物である。

国民形成における過去への回帰は、他の国にも見られるが、パンテオンを国王の墓とし、イタリア王国と古代ローマの連続性を作りだすことによって、すでに行われていた。この連続性をさらに視覚的にも強調したのが、この「祖國の父」の祭壇である。背後に古代ローマの発祥の地であるカンピドリーオの丘を従え、古代ローマの政治・社会の中心地であったフォロ・ロマーノを威圧するかのようによびえ立つ記念堂は、ローマの都市空間の美的感覚においても、また歴史的雰囲気からも極めて異質なものであるが、国家イデオロギーを感じさせるに十分である。

「祖国の父」の祭壇建設のプロジェクトは、国王の死後直ちに議会に提出された。その建設に半世紀に及ぶ年月と膨大な費用を費やした。その建築の目的は、除幕式に際して次のように述べられている。

「共和制ローマや帝政ローマの建築物と肩を並べる壮麗な作品で、(イタリア人の)天賦の才とラテンの根気強さを後世に長く伝える見事な証明であり記録であり、それによって第三のイタリアは自分たちの優位の伝統を明言することができる」。

記念堂には、明確な二つのイデオロギーが盛り込まれていた。第一は、「民族革命としてのリソルジメントの思想・価値を寓意的に表現する」ことであった。第二は、「国王を写実的に象徴化することであった」⁽¹⁰⁾。

記念堂の正面は四段に区切られた階段がある。その両側に高さ五メートルの「思想」と「行動」を寓意化したブロンズの彫刻が配置されている。階段の上には「祖国の祭壇」と呼ばれる広場がある。広場の大理石の壁には、ローマをイタリアの首都とするまでの歴史的過程を描いた寓意的なレリーフが幅六メートルに

渡ってほどこされている。その中央に金メッキを施したブロンズの「ローマ像」が配置されている。

「祖国の祭壇」の中央の、労働と祖国愛の凱行進のレリーフがほどこされた約一二メートルの台座の上に、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世の騎馬像がそびえ立っている。騎馬像は、重量五万キロ、高さ一二メートルである。銅像の頭部が二・五メートル、重量が二一〇〇キロ、馬の胸帯の重量が七〇〇キロ、剣の重量が三五〇キロである。馬の腹部の内部は二〇人がテールについて座れるスペースがある。

国王の騎馬像の周りには、シンボリックな一群の寓意彫刻が配置されている。「調和」・「犠牲」・「思想」・「行動」・「権利」・「勝利」がそれである。記念堂の側面の回廊入口には「政治」・「哲学」・「革命」の寓意彫刻が、二階のテラスを登ったところには「自由」と「統一」の寓意彫刻がそれぞれ配置されている。記念堂の両脇には、ティレニア海とアドリア海の寓意彫刻がイタリア王国と「祖国の父」を象徴する記念堂を挟むように配置されている。⁽¹¹⁾

国家指導者が記念堂を通じて伝えようとした国家イデオロギーが、これらの寓意彫刻に込められていることは明らかである。イデオロギーとは、リソルジメント運動の諸価値——統一・自由・犠牲・行動・勝利——であった。それだけではない。記念堂の除幕式が行われた一九一一年という時代をストレートに示すように、統一五〇周年を記念してトリート・ローマ・フィレンツェの三箇所で開催された。イタリア王国の第一番目の首都であり、産業革命の一つの拠点であるトリートでは工業製品の、第二番目の首都フィレンツェでは美術と花の、そしてイタリア統一の精神的・政治的シンボルであったローマでは政治的・イデオロギー的特徴をもつ博覧会が開催された。この政治的・イデオロギー的な特徴をもつローマの博覧会に、記念堂も加えることができる。

政治的・イデオロギー的メッセージは、当時の公文書や新聞記事に溢れている。それは、統一から五〇年でイタリアが達成した「進歩」、「シーザーのローマ」と「教皇のローマ」に続く「第三のローマ」といった

言葉に示されている。「第三のローマ」という言葉に象徴される記念堂のもつ国家イデオロギーは、除幕式の行われたその年に具体的な行動となって現れる。一九一一年九月、イタリアはトルコに宣戦布告し、一月リビア併合を宣言した。トリポリタニアに侵略し、トルコと戦争を行うことは、イタリアが帝国主義政策を行えるだけの十分な力を備えたことを内外に誇示することでもあった。このことは、トリート博覧会で示された工業・技術・経済の「進歩」を背景に、「祖国の父」の記念堂に込められた国家イデオロギーを実践したことに他ならなかった。イタリアの帝国主義政策は、アッサブの植民地化（一八八二年）、マッサウ占領（一八八五年）、エリトリア植民地建設（一八九〇年）によって地ならしされていた。それだけに、リビア併合にたいする決定的な反対は国内では起こらず、世論の圧倒的な支持を受けたのである。戦争熱に沸き立つイタリアの世論の一端を、「イタリアのトリポリ」という見出しをつけた新聞記事に見いだすことができる。

一九世紀イタリアのリソルジメント運動が、ナショ

ナリズムの運動であったことは言うまでもない。その統一と独立を象徴する「祖国の父」の記念堂建設のプロジェクトは、国王の死去した一八七八年直後に、決定されている。しかし、リソルジメント五〇周年にあたる一九一一年の除幕式において、記念堂に込められた国民形成の統合イデオロギーとしての「祖国の父」とリソルジメント運動の諸価値は、二〇世紀の帝国主義イデオロギーにすり替えられていた。記念堂に飾られたリソルジメント運動の諸価値を寓意化した彫刻は、二〇世紀のイタリアが創りだそうとしていた神話となっていた。「祖国の父」ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世の騎馬像は、国民統合のイデオロギーであると同時にイタリアの帝国主義政策を象徴するものであった。

近代イタリアの統合イデオロギーを君主制に求め、統一によって「祖国の父」となるヴィットーリオ・エマヌエーレ二世がイメージがどのように作られ、どのように機能し、どのように変質していったか、を論じてみた。だが、そのイメージの形成・変質を史料に基

づいていかに論証しえるかという重要な問題が残されている。これは今後の課題である。さらに、イタリアにおける国民形成は、日本のそれと比較すると、長い時間を要し、きわめて不十分なものであったと言わねばならない。逆に、日本はきわめて短い期間に、恐るべく徹底した形で統合イデオロギーとしての天皇制が機能した。両国の統合イデオロギーとしての君主制・天皇制を見ると、両極端の例を示していると言えよう。イタリアの統合イデオロギーとしての君主制が不十分にしか機能しなかったこと、この理由の解明が、残されたもう一つの課題である。

- (1) 中村正則『歴史のこわさと面白さ』筑摩書房、一九九二年、二六ページ。
- (2) 鹿野政直『国民』のゆらぎ』『思想』岩波書店、一九九三年、二月号、一—三ページ。
- (3) 西川長夫『国家イデオロギーとしての文明と文化』『思想』一九九三年五月号、四ページ。
- (4) 本稿は、多木浩二『天皇の肖像』(岩波新書 一九九二年)の分析方法に負うところが多い。記して感謝

の巻を採じた。

- (15) M. D'Azeglio, *Miei ricordi*, Milano 1870, pp. 289-290.
- (16) A. Mario, *Camicia Rossa*, Milano 1954, pp. 156-157.
- (17) B. Tobia, *Una patria per gli italiani*, Roma-Bari 1991, pp. 139-140.
- (18) 多木龍三著『前掲書』三九頁。
- (19) G. Gonetta, *Il XXV anniversario del Risorgimento italiano ovvero ricordo e ragguaglio ufficiale del Pellegrinaggio nazionale del gennaio 1884*, Roma 1892 : G. Isola, *Un luogo d'incontro fra esercito e paese : Le associazioni dei veterani del Risorgimento (1861-1911)*, in *Esercito e città' dall'Unità' agli anni trenta*, 1989, vol. 2, pp. 499-519.
- (20) *Le Esposizioni di Roma e di Torino nel 1911*, Milano 1911, n. 3.
- (21) P. Acciaresi, *Giuseppe Sacconi e il Monumento a Vittorio Emanuele II a Roma*, Roma 1911 : M. Venturoli, *La patria di marmo*, Pisa 1957 : *Il Vittoriano. Materiali per una storia*, vol. I-II, Roma 1986 : *Le Esposizioni di Roma e di Torino nel 1911*, Milano 1911.

(東京理科大学教授)